

も、その直後にも、雨は降っていたのだろう。そしてトゥワの人びとは、今日も壺をつくるために陽がさしはじめるのを待っている。ひさしのもと、久しぶりに再会した友人との会話に華を咲かせるフトウの人びとよりも、調査のゆく手を阻まれて、おもわず空を見上げてしまうわたしよりも、すこしばかり切実に。

生業は雨に依存する。生業を介した日常の邂逅や交渉もまた、雨に依存するだろう。それならば、彼らのあいだに存在する対立や牽制すら、ひとえに雨のせいになければいいのに…。すすまない調査を雨のせいにしながら、いささか安直に、すこし恨めし気に考えてみる。

帰ってきたイモムシ

藤岡 悠一郎*

これは2006年に本誌に報告したフィールドワーク便り「オヴァンボの昆虫食と幻のおかず」[藤岡 2006]の後日談である。そこでは、私が調査を続けているナミビア共和国北部のオヴァンボ社会にみられる昆虫食について報告した。昆虫食とは、昆虫を食することにつながる文化である。日本でもイナゴやハチノコをはじめ、ザザムシやカイコの幼虫、セミ、ゲンゴロウなど、地域によって異なる昆虫が食材として用いられ、現在でも一部の人々には根強い人気がある。近年では、2013年5月にローマで開催されたFAOの国際会議において、爆発的に増える人口を養う潜在的な食料源として昆虫が注目を浴びた。本稿では、前稿で「幻のおかず」として紹介した

昆虫との念願の出会いをもとに、そんな昆虫食にまつわる、ちょっと驚いた経験を報告したい。

本稿の舞台となるナミビアは、国土のほぼすべてが乾燥気候下にあり、海岸沿いにナミブ砂漠が連なる乾燥国である。年間降水量が400 mm程度のサバンナに暮らすオヴァンボ人は、1年に1回やってくる雨季に農耕を営み、トウジンビエを育てて生計を立てている。彼らの日々の食事のなかで、昆虫は重要なおかずのひとつである。特に雨季に現れる数種類のイモムシたちは、肉や魚に勝るとも劣らないタンパク源だ。前稿でも紹介したモパネワーム（モパネという木の葉を食べるヤママユガ科の蛾の幼虫）は、プリプリ太っ

* 近畿大学農学部



写真 1 オカナンゴレ (*Coenobasis* sp.)

ていて食べごたえがあるため、日々のおかずの一品として重宝される。食べ方もさまざまで、乾燥させたものをそのまま食べたり、炒めたり、煮たり、スープにしたりと、おいしく食べようとする工夫がみられる。

さて、ここで話したいのは、オカナンゴレ (*okanangole*) というイモムシである。オカナンゴレは、イラガ科のイモムシで、日本のイラガの幼虫に似た形をしている (写真 1)。体長は 3 cm くらいと小さく、背中側の体内に毒針をもっていて、強く押すと刺されてかゆくなる。いってみれば、ちょっとやっかいなケムシなのだ。しかしこれが意外なほどおいしく、村の人たちに「これが一番おいしいおかず」といわしめるほどの実力をもっている。しかし、私は 2002 年より毎年雨季には村を訪れているのだが、このイモムシに出会うことはまずなかった。また、村人に尋ねても 1990 年頃からまったく発生していないという。そのため、子どもたちのなかにはその姿をみたことがない者も多く、オカナンゴレの存在は昔話のように語られ、もはや忘れ去られかけていた。それがゆえに、私に

とっても「幻のイモムシ」だった。

オカナンゴレの存在を知って以来、私はそのイモムシを一度食べてみたいという気持ちを強くもち続けていた。そこで、毎年村を訪れるたびに、調査の空き時間を見つけてはこの昆虫を探し続けた。探し回るうちに、稀ではあるが、木の枝についた成虫になる前の繭やイモムシに出会えたことがあった。しかし、それらの多くは蜂が寄生するなど、きちんと育っているものはほとんどみるのができなかった。

そんなことが続くなか、2012 年から 2013 年の雨季に再びナミビアを訪れた。ナミビアでは 2007 年以降、異常に雨が多くなり、毎年のように洪水と大雨に関する国家非常事態宣言が発令されていた。村の畑も水に覆われ、トウジンビエにかなりの被害が生じ、村人たちは食料確保に苦労していた。ところが、この年の雨季は 1 月で雨がパタリと止まり、例年もっとも雨が多い 2 月から 3 月にほとんど雨が降らないという異常事態が発生した。この年もまた、人々は 1 年の食料を確保するのが大変になることが予想された。

2 月半ば、雨季なのにカラッと晴れたある日、私は村から 30 km ほど離れた町に車で買い物にでかけた。スーパーに寄った帰り道、日が傾くなか家路を急いでいると、道端のアカシアの木の傍でポツリポツリとおばさんたちが立って木を眺めていた。その日は「なんだろう」と思いつつ、特に気に留めなかったが、数日後、また同じように木の下で人々が何かしていた。気になって、二人連れのおばさんがいるところで車を止め、「何

をしているのか」と聞いてみると、「オカナンゴレがでた」というのではないか（写真2）。これまでずっと姿をみせなかったオカナンゴレが現れたとは信じられず、半信半疑でいると、ひとりのおばさんが自分の集めたオカナンゴレをみせてくれた。ビニール袋の半分に、数百匹くらいのイモムシが固まって蠢いている。確かにオカナンゴレだ。びっくりして木をみても、いるわいるわ、葉の上に乗ってムシャムシャ葉を食べているもの、枝をよじ登っているもの、じっとしているもの、点々とイモムシたちの姿が目に入った。オカナンゴレは緑色で、ところどころ青い斑点がある美しいイモムシだ。夕日のなかで、イモムシたちはひときわ輝いていた。一方で、彼女たちは黙々とイモムシを摘み取っては袋のなかに入れていく。背中を触ると棘に刺されるため、体の側面を指で軽くつまみ、ひょいと持ち上げて袋のなかに入れる。オカナンゴレの自慢の毒針は熟練のおばさんたちには通用しない。みるみるうちに袋いっぱいになり、彼女たちは揚々と引き上げていった。感慨に浸った私も車に乗って再び家路を急いだ。すると道中、夕陽



写真2 オカナンゴレを採集しているおばさんたち
(2013年2月19日撮影)

の沈むサバンナを背景に、女性たちとオカナンゴレの攻防がいたるところで繰り広げられているのであった。

村に帰ったのち、オカナンゴレについて再び知り合いの人に聞いてみた。私がまず疑問に思ったのは、オカナンゴレは「幻のイモムシ」というよりも、そもそも数十年に1回くらい発生するような生き物だったのだろうか？ということである。しかし、その点はどうも曖昧であった。1990年頃は毎年のように発生していたと話す人もいた。もし、数十年に1回しか発生しないのであれば、そのような記憶は鮮明に残ると思われるので、これほど長い間発生しないことはなかったのではないか。では、なぜ今日に至るまで、しばらくでてこなかったのだろうか？もっとも、生き物の世界には、13年ゼミといわれるセミの大発生やフタバガキの一斉開花など、長い時間スケールのイベントというのは存在する。いや、むしろそうした周期のイベントは、人に知られていないものも含め、案外多いのかもしれない。

3月になると村人たちのオカナンゴレ・フィーバーも終息し、平穏な日々に戻った。私は3月半ばに一度日本に戻り、4月半ばに再びナミビアを訪れることとなった。結局、この年はナミビアにとって過去数十年でもっとも深刻な旱魃となった。降雨はすでに止まり、乾季の青い空が広がるなか、村に戻った。4月20日のことである。例年ならば、2m以上の高さにまで育ったトウジンビエが広がり、人々が収穫で忙しくしている時期であるが、この年は小さく枯れてしまったトウ

ジンビエしかみあたらない。そんななか、いつもの知り合いの家に行くと、お婆さんは留守にしていた。子どもに「どこにいったの?」と聞くと、「オカナンゴレを採りにいった」という。「えっ、もう終わっただろうに」と不思議に思ったが、夕方再びその家を訪ねてみると、お婆さんがガラス瓶に詰まったまだ蠢いているたくさんのオカナンゴレをみせてくれた。

「イモムシたちが帰ってきたんだよ!」

お婆さんは、どこかに出かけていたイモムシがまた村に帰ってきたような言い方をした。「そんなバカな。」このイモムシはそんなに大きくなる種でもないし、少なくとも前にいたときと同じイモムシたちが帰ってきたわけではあるまい。おそらく、2 度目の発生があったのだろう。季節外れのイモムシの出現に、村は再び沸き立っていた (写真 3)。

このオカナンゴレにまつわる出来事は、私が人々の生業を研究するうえで、生業のリズムは季節変動、年変動という思い込みをもっていたことを気づかせてくれた。もし、今年この地域を訪れていなければ、私にとってオカナンゴレは「幻のイモムシ」のままであったはずだ。自然災害も似的り、長い時間スケールのなかで発生し、地域に大きなインパクトを残し、少なからず人々の生活を変えていくものがある。イモムシの大発生は、そこまでのインパクトをこの地域にもたらしたとは思えないが、しかし、若者たちの脳裏に「オカナンゴレというイモムシがうまい (まずい?)」という忘れ得ぬ印象を植え付けたことは間違いないだろう。



写真 3 再度現れたオカナンゴレを採集するお婆さん
(2013 年 4 月 20 日撮影)

それにしても、女性たちが嬉々として話す姿が忘れられない。なぜか、多くの人が、イモムシたちが「帰ってきた」という表現をした。これは、長い間みられなかったが久しぶりに発生したこと、また 2 回目の発生のときのこと、両方の場合で使われていた。今にして思えば、数年前に私が村人にオカナンゴレについて尋ねたとき、あるおじいさんが「オカナンゴレは早魃のときに帰ってくる」と話していた。そのときはあまり実感がわかず、特に気に留めなかったことを恥じた。

長い間、待ちに待った気持ちが“おかえり”という気持ちになって現れたのだろうか。イモムシを手にもつお婆さんたちの笑顔も数十年に 1 度というような満足げなものであった。

引用文献

- 藤岡悠一郎. 2006. 「オヴェンボの昆虫食と幻のおかず」 アジア・アフリカ地域研究 5(2): 262-266.